

国際会議 “Actinides '97” 及び “APSORC '97” に参加して

アクチノイドメスバウア分光研究グループ

佐伯 正克

上記2つの国際会議に相次いで参加する機会を得た。“Actinides'97”は1975年に最初に開催された後、1981年からは4年毎に開催されている会議であり、今回は最初の開催地であるドイツの保養地バーデンバーデンに戻って、9月21日から26日まで開かれた。集まった論文数は、約30カ国から、300件以上で、内訳は基調講演4件、招待講演31件、口頭発表74件、ポスター発表200件以上であった。日本からの参加者は約60人（内原研から約半数）と非常に多かった。一方、日本からの基調講演及び招待講演は各1件であった。これに対する評価は読者各位におまかせすることにしよう。会議はJ. Fuger (EC- ITU) 議長の挨拶で始まり、フランスのB. Barré (CEA) による基調講演「世界における原子力エネルギーの将来」が続いた。以後は2会場でのパラレルセッションであった。この形式は最終日を除き同じであった。ポスター発表は2分され、1日目及び2日目の16時から19時が発表者の責任時間であった。しかし、ポスター発表件数は200以上であり、セッションも10に分類されているため、ポスター掲示は初日から終日までが義務づけられた。会議の内容は多岐にわたり、全体を紹介することは不可能なので、筆者が強く興味を持った発表のみを紹介する。数十mgのアインスタニウム (Es) の金属を合成した発表 (ORNL) では、ヘリウム雰囲気グローブボックス中でアルファ線の飛跡のため合成された金属の上部空間が放射状に青白くイオン化している写真が示され、多いに感動させられた。日本ではNp金属が漸く合成可能(東北大・金研)になるようとしている段階であり、開きは大きい。原研でも、ウランで行われ始めているような基礎科学を、せめてネプツニウム (Np) にまで広げられないものかと改め

On International Conferences of “Actinides '97” and “APSORC '97”

Masakatsu SAEKI

Research Group for Mössbauer
spectroscopy of Actinides

て感じた次第である。Npの比放射能は、実質的には高濃縮ウランの数倍でしかなく、その物性次第では、材料として考えられないこともない存在の元素であることを付記したい。また、今年の8月末に名前が確定したばかりの106番元素シーボギウム (Sg) に関する化学についての報告も2件あった。明らかにアクチノイドとは異なる6族の挙動を示し、超アクチノイド化学の分野が広がり始めていた。なお、次の本会議は2001年に日本で、原研が主体となり開催されることが決定された。

“APSORC '97” (Asia-Pacific Symposium On Radio Chemistry) は放射能発見から101年(第2世紀の始まり)を記念して、第41回放射化学討論会に併設して、熊本大学で開催された会議である。参加者は全体で約200人、外国からの参加者も、G. T. Seaborgの後継者であるD. C. Hoffman女史や放射化分析のR. E. Jervisを始め、放射化学、核化学界の権威を含め比較的多かった。発表件数は全体で199件、内訳は基調講演7件、特別講演9件、口頭発表38件残りはポスター発表で145件であった。併設された放射化学討論会でも、35件の口頭発表があったのでなかなかの盛会であった。基調講演の1つで、ドイツ・マインツ大学のGulichが、我々のデータを引用し紹介してくれた。我々のデータも少しは世の中に浸透し始めた証であろう。外国からの参加者の中には、是非継続して定期的に開催するよという意見が多かったが、次回何時何処で開催するかは後日に廻された。主催者は国内参加者の30%は学生なので、日本の放射化学の未来はまだ明るい胸を張ったが、そうあって欲しいものである。